

国際スポーツ・イベントによる主体化

——一九三二年のロサンゼルス・オリンピックと田村(佐藤)俊子「侮蔑」——

日 比 嘉 高

1 はじめに

これまでの研究では、カリフォルニアの俳人を中心に編まれた自由律俳句集『炬火』(一九三三年)、田村(佐藤)俊子「侮蔑」(一九三八年)、田中英光「オリンポスの果実」(一九四〇年)を用いながら、スポーツ・イベントとナショナリズムと人々の主体化との関係性、および一九三〇年代における国際イベントが、いかなる〈接触領域〉として機能したのかについて考えた^①。この論考では、田村(佐藤)俊子の「侮蔑」に焦点をしぼり、その作品に描かれた主体化のあり方を考察する^②。

まず簡単に、一九三二年のロサンゼルス・オリンピックについて整理しておく。第一〇回の夏季オリンピックは、米国ロサンゼルスを会場として開かれた。米国で開催される大会としては第三回のセント・ルイス大会(一九〇四年)に続く二度目の大会となる。米国太平洋岸では初めての開催となるこの大会に向けて、地元の財界やメディアが結束して援助し、十万五千人を収容するメ

インスタジアム、一万二千席を擁する水泳施設などが建設され、大がかりな準備が進められた^③。ただし、期せずしてこの大会は世界大恐慌のなかでの大会となり、ヨーロッパからの選手派遣は激減、一方で日本の選手団は前回と比較して三倍以上増となる一三一人だった。

日本では一九二〇年代を通じてスポーツ文化の裾野が広がり、新聞社などのメディアが主導してさまざまな大会や対抗戦も行われ、人気スポーツの大きな大会はメディア・イベント化していた^④。競技によっては選手たちの実力も世界レベルとなり、水泳を始め、世界の選手たちと比肩する水準となっていた。ロサンゼルス・オリンピックは、世界的な注目が集まる大イベントであり、そこで日本のスポーツのレベルの高さ、ひいては日本という国の国力の高さをアピールすることができるかと期待されていたのである。

本研究の文脈においては、この大会がロサンゼルスという、米国日系移民最大の集住地の一つで行われた点が重要である。日本

の代表選手団が活躍するに際して、ロサンゼルスの日系人のサポートは追い風になると期待されていた。⁵⁾ 田中英光の「オリンピックの果実」(『文学界』一九四〇年九月)にも、選手たちを応援し、協力を惜しまない地元日系人たちの姿が書き込まれている。

2 田村(佐藤)俊子と「侮蔑」

田村(佐藤)俊子は明治末から昭和初期にかけて活躍した文学者だが、登場人物の女性を彼女独特の感覚描写をもって描きながら、同時に同時代の女性解放運動とも接点を有していた点で高い評価を受けて来た。彼女にはヴァンクヴァー、ロサンゼルス、上海という海外での活動歴があり、近代における女性の移動とその表現のあり方の観点からも近年再評価の気運がある。

俊子は一九一八年、先に渡航していた恋人の鈴木悦を追って、カナダに渡った。ヴァンクヴァーに居を定め、労働運動や婦人運動に従事するかたわら、当地の日本語新聞『大陸日報』に婦人論や短歌などを発表した。⁶⁾ 一九三三年には一時帰国中だった鈴木悦が病没し、彼女はロサンゼルスへと移動した。やはり同地の日本語新聞『羅府新報』にエッセイなどを載せていたが、一九三六年三月に帰国している。

帰国後の彼女の日本滞在は短かった。一九三八年一二月には中央公論社の特派員として、再び中国大陸へ渡った。彼女が日本に

滞在した三年足らずの間に、米国滞在時代の経験を生かした日系二世たちの物語が集中して書かれている。本論で扱う「侮蔑」もその一つである。

この時期に書かれた彼女の日系二世関係の小説は次の通りである。一九三六年一〇月、「小さき歩み」(『改造』)。同年一二月、「薄光の影に寄る―小さき歩み(続)―」(『改造』)。一九三七年三月、「愛は導く―小さき歩み(完)―」(『改造』)。一九三八年七月、「カリホルニア物語」(『中央公論』)。同年一二月、「侮蔑」(『文芸春秋』)。これらの作品については近年研究が進みつつある。⁷⁾ しかし彼女の社会主義思想との関連や、帰国後の日本社会の観察との照応、コスモポリタニズムの問題など論点は多く出されているが、オリンピックとの関係に着目した研究は存在しない。今回はこれらの作品中、ロサンゼルス大会の描写を含む「侮蔑」を検討する。あらずじは次の通りである。

日系二世のジミイは一九二〇年頃の排日の風潮が強い北カリフォルニアで生まれ育った。アメリカ式の教育を受け、高い教養を持ちながらも、アメリカの社会に出て行くことはできないということが、二世たちの性格を規定していた。この状況は、アメリカにいながら日本人社会と故国日本のことだけを考えていた彼らの親の世代、一世たちのあり方が原因しているところでもあった。一世の封建性と閉鎖性が、アメリカ人の排日思想を呼んだのであった。ジミイは、日本人社会の外に出ようとしない二世たち

を覚醒させようとする運動を始めたが、満足な反応は得られなかった。

そのころロサンゼルス・オリンピックが開催され、日本人の選手団が大活躍をした。外国選手と対等に戦い、競技に敗れても優れたスピリットを見せる選手の姿は、ジミイや二世たちに強い感銘を与えた。アメリカ人たちは日本を称賛した。ジミイの心は日本に向かい、日本の文化をより深く知るために日本へ渡った。

しかし日本人々は、移民の子供であり、日本語も、日本のしきたりも十分に理解しない二世たちを侮蔑し、他者化した。ジミイは熱心に日本文化を勉強したが、理解することは難しかった。ジミイの同郷で、カリフォルニア大の同窓生でもあるガールフレンドの万利子も日本へやってきた。彼女も同じ壁にぶつかり、そして彼女は故郷であるカリフォルニアへと帰ることを選んだ。ジミイは、日本の社会で疎外感を覚えながら、しかしなぜ自分が日本に魅かれるのかと考え込む。移民の子が日本で生きる事の寂しさの謎を解くまでは帰らないと、彼は万利子に言った。

ロサンゼルスで二世祭が開かれ、二世たちの社会進出が始まっていた。ジミイはそれを知らせる仲間や万利子の手紙を読みながら、「自分の故郷もアメリカにあるのだろうか」と自分自身に問うた。

以上のあらすじを見ると、カリフォルニア生まれの日系二世たちの民族的な意識が変容する大きなきっかけとして、オリンピック

クの日本人選手団の活躍が位置づけられていることがわかる。より深く、この点を分析してみよう。

3 「侮蔑」のオリンピック表象を考える

まず背景として、カリフォルニア生まれの二世たちが生きなければならなかった、マイノリティとしての社会状況がある。それは俊子自身が「小さき歩み」の連作や、「カリホルニア物語」において追求してきたテーマでもあった。たとえば若い学生たちのもつ人種的な懸隔の感覚を「小さき歩み」は次のように描いている。

学校の外の生活——ソシアル・ライフと彼等は呼ぶ。——大人に近づく学生の間には幼いソシアル・ライフの交渉が学校の外で初まるのである。こんな時に同じ人種でない為の疎外が——ダンスの相手に選ばれなかつたとか、或る会に招かなかつたとか、こんな疎外が友人の間知らずくに行はれることを、不快に見出だすのは差別される異人種の学生たちであつた。明瞭な人種による差別が斯うした時に、鏡に映る自分の姿をふと認めたやうに「自分は人種が異ふ」と云ふ意識を喚び覚まし、「除け者」「別な者」として扱はれる侮辱が、彼等の若芽のやうな軟らかなこゝろに、一とつのトゲを刺す

のだった。(一〇五—一〇六頁)⁽⁸⁾

また俊子は「カリホルニア物語」においても二人の日系移民二世の若い女性を取り上げ、結婚や仕事にまつわる親世代との桎梏や、主流社会との文化的な差異がもたらす人生の選択の困難さを描いている。

「侮蔑」もやはりこれらの物語と同様に、米国生まれの二世たちの困難から物語をはじめている。冒頭で描かれる主人公のジミイをはじめとした二世たちの造形は、次のようなものである。

亜米利加に生れたジミイは、一九二〇年頃の、いちばん頂点の排日の悪感情の中で、恥ぢの多い少年期を過ごした二世の一人であった。子供を背負つて畑に出て働く日本婦人の画が、英字紙の一面に事々しく掲げられたり、日本人種は黒人種よりも劣等だと云はれるやうな人種的な虐待を文明人から受けながら、歯を食ひしばつて働く親たちの懐に成長した一人であった。

こんな環境の中でおぼ／＼と育つた二世たちは、押し挫がれた精神が其のまゝの性格となり、教養で躰けられた純直さはあつても、萎縮した心は伸び／＼と白人の社会へ進んで行かうとする強気を失はせてゐた。そしてアメリカの高い教育でカルチュアされた頭脳は、其の頭脳で自分たちの生活の矛

盾を考へることが出来ても、其れを広い社会に向つて押切る力は持てなかつた。(三七六頁)

物語が言及するのは、一つには米国太平洋岸を中心に広がった排日運動という社会的背景である。日本人児童の隔離教育措置や、土地の所有制限を定める法の制定などといった公的な権利制限の問題や、メディアによるプロパガンダとも連動しながら、排斥の感情はカリフォルニア州をはじめとした日本人の多く住む地域において人種的な対立感情を深めていた。⁽⁹⁾

もう一つ、テキストは日系移民たち自身の中にあつた世代間対立という溝についても言及する。一世たちは日本式のやり方を貫き、しばしばそれを二世たちに押しつけようとする。しかし二世たちはアメリカ式の教育を受け、英語を話し、アメリカ的な価値観をもつて成人していく。田村(佐藤)俊子の作品が描き出すのは、人種的懸隔と世代的懸隔という二つのへだたりの中で苦しむ若い二世たちの姿なのである。

「侮蔑」においてオリンピックの派遣選手団がやってくるのは、そうした彼らの前である。日本人選手の活躍は、二世たちに何をもたらしただろうか。

ジミイは初めて、日本選手たちの上に、自分の親の生れた日本を見出した。地図で見る小さな日本、無智な一世たちを

生んだ日本を代表する選手たちは、ジミイの目を驚きで見張らせるほど生氣と剛気に充ちてゐた。教養的な態度、其の教養は自分たちの受けたものよりも、もつと深く、系統付けられた品格があるやうに思はれた。この青年選手を生んだ日本が、自分の無教養な親たちを生んだ非文明な日本と同じだとはジミイには想像もされなかつた。

日本選手は外国選手と対等の競技に出来るほどの国際的な名誉と地位とを持つてゐた。そして競技には敗れても外国選手を凌ぐスピリットの強さで勝つてゐた。(三七九頁)

二点に注目したい。まず、日本人選手への敬意が、やはり「無智な一世」との対比においてなされていることに気づく。二世たちの抱えているコンプレックスは、アメリカの主流社会とは違う文化を抱えたまま米国社会で生きる親世代の一世たちへのいらだちと軽蔑にその根の一端があるということだろう。これに対し小説の語りは、日本人の青年選手たちの、外国選手と比肩しうる「国際的な名誉と地位」「スピリット」を対置している。それがジミイたち二世の誇りの感情を呼び起こしたのである。

さらに、この日本人選手たちへの敬意が、スポーツ選手としての身体能力や記録の高さに依っているのではないということにも注目すべきだろう。ジミイらが注目するのは、日本人選手たちの「教養的な態度」であり、「品格」だった。二世は、競技における

勝利に注目してはいたのではなかつた。むしろ選手たちのもつていた社会的地位や精神性、文化資本こそが、二世の誇りの感情を刺激したのであつた。

作品は二世たちの感銘を語り、周囲のアメリカ人たちが日本を賞めることに喜ぶ二世たちの感情を描く。そして二世たちが、日本選手団を応援する声に和するようすを次のように描写した。

勝利の日本の旗が高く競技場に掲げられた時は、二世は思はず興奮した。

「ニッポン——」

自分の唇から迸る声援の声から、二世は自分の血の中に新しい日本を感じて一層興奮した。(同頁)

二世たちは「自分の血の中に新しい日本を感じ」たとされる。一世の親を軽蔑し、それを「非文明」だと考える二世の思考は、アメリカの主流社会の文化的影響を受けていると言つていいだろう。これに対し、日本人のオリンピック選手の活躍は身体性の象徴である「血」に訴えかけている。二世たちが感銘を受けたのが国際的な——つまり身体にまつわる問題である「人種」を越えうる——「教養」であり「品格」だったことを考えれば、「教養」と「血」という矛盾する要素がすでにここには含まれていることがわかる。

この後、ジミイは日本を目指す。「日本選手が残して行つた「ニッポン」は、二世の上に新らしい日本の感覚で、自分の生活を感じさせ、そして考へさせるやうな強い印象であつた」(同頁)。しかし、彼の祖国を求める旅は失敗に終わる。日本の「文明」に魅かれたジミイだが、一方で彼は自身の「血」の力を信じていたわけである。日本人の「血」をもっているならば、日本の「教養」のなかに入り込めるといふ暗黙の想定がジミイの中にあつた。そして当然「血」はそのまま「教養」には結びつかない。当初からあつた「教養」と「血」の乖離が、ジミイの失敗の一つの原因になっているといえるだろう。

「侮蔑」の描くスポーツによる主体化がどのようなものだったのか、整理してみよう。「侮蔑」が示していたのは、スポーツは教養・文明と相関するという考え方であつた。スポーツへの参加は国際的＝西洋的尺度への参加の証明であつた。これは近代スポーツが抱えていた貴族文化としての一面を引きずるものといつてよいだろう¹⁰⁾。二十世紀に入ってスポーツは大衆化していったが、なおそこで支配的だったのは西欧的価値観であり、非西欧諸国にとっては、オリンピックに参加し、活躍することそのものがその価値を身につけることであつたのかもしれない。それゆえ、スポーツの価値は勝敗だけではない。「教養」「品格」「スピリット」などという文化や精神にまつわる言葉が、スポーツを語る言葉の中で前面化するのである。

さらに「侮蔑」は、スポーツ・イベントが「日本」を開催地へと運び、「日本」と観客とを結びつけ、そして「日本」を後に残すようすを描き出す。小説作品の読解によりわかるのは、オリンピックはアスリートを集め、競技会を行つただけではないということである。国別対抗競技という枠組みは、国家を前景化し、観客へのイデオロギー的な呼びかけを行う。「日本」の文明的価値を「発見」したジミイは、みずから「ニッポン」と叫ぶことで、自身の「血」を確認し、「日本人」として主体化していくのである。その影響は競技を見る瞬間だけに留まらない。「ニッポン」を、「日本人選手が残して行つた「ニッポン」は、二世の上に新らしい日本の感覚で、自分の生活を感じさせ、そして考へさせるやうな強い印象であつた」(三七九頁)。「ニッポン」はオリンピックが終わった後も、二世の若者たちの間に影響を残し、彼らの精神と生活を作り替えていった。この意味で、「日本」を求めて親たちの祖国へと向かつたジミイの物語——その失敗の——は、長く尾を引くオリンピックの余波を語っているともいえるだろう。

4 まとめ

日系二世にとって、ロサンゼルス・オリンピックは、「日本」を再発見させる契機となつた。田村(佐藤)俊子の「侮蔑」は、

排日思想に圧迫されて育ったカリフォルニアの二世たちの状況を背景に置き、「日本」を求めた二世たちがこの国際的なスポーツ・イベントを機にその自己認識を変容させるありさまを描き出した。さらには二世たちが実際に日本へと留学し、現実の日本にであって幻滅するところまで描くことにより、彼らの育てた「日本」像が、幻想に過ぎなかったことをも鋭く描出している。

注目すべきなのは、スポーツがこの時代、単なる勝敗や国威発揚を競うイベントではなかったことである。「教養」や「文明」すなわち象徴財が競われていることが問題である。オリンピックが単なる運動競技会以上に、観客の主体化の力を発揮した理由はここにあると考えられる。スポーツはこの時代、文明化の尺度そのものだった。それを国際的な競合の舞台において賭けるからこそ、観客はより強くその文明の淵源である国の形ニナシヨナリテイに同一化しようと欲したのである。

「侮蔑」が語っているのは、しかもオリンピックが人々に呼びかける力が短期的なものにとどまらないということであった。オリンピックの運んだ「日本」は、オリンピックが終わった後の二世たちの姿を変えたと「侮蔑」は語っている。オリンピックがスポーツだけでなく「教養」や「品格」、「スピリット」を問い、人種間の優劣を測る尺度に影響を与え、ナシヨナリズムという回路を通じて見る者の「血」に訴えかける巨大な装置なのだとして、その影響が長く残ることはむしろ自明であるだろう。スポー

国際スポーツ・イベントによる主体化(日比)

ツ・イベントによる主体化は、イベントとともに終わらないのである。

注

- (1) 「炬火」および東西朝日新聞社によるオリンピック派遣選手応援歌については、拙稿「詩がスポーツをうたうとき——一九三二年のロサンゼルス・オリンピックの場合——」『跨境 日本文学研究』(第2号、二〇一五年六月)がある。また拙稿「(代表する身体)は何を運ぶか——一九三二年のロサンゼルス・オリンピックと日本・米国・朝鮮の新聞報道——」(河原典史・日比嘉高編著『メディア——移民をつなぐ、移民がつなぐ——』クロスカルチャー出版、二〇一六年二月)も参照。
- (2) 代表作を執筆していた時代の筆名で呼ばれることの多い田村俊子だが、本考察の取り扱う時期においては佐藤の名を用いていた。本論文では適宜、田村(佐藤)俊子もしくは俊子と呼ぶこととする。
- (3) 一九三二年のロサンゼルス・オリンピックに関しては武田薫『オリンピック全大会——人と時代と夢の物語——』(朝日新聞出版、二〇〇八年二月)がコンパクトに情報をまとめている。また米国のスポーツ文化史の文脈における位置づけは、井上弘貴「アメリカン・イメージの構築——32ロサンゼルス大会の前史とアメリカニズムの変容・持続——」『オリンピック・スタディーズ——複数の経験・複数の政治——』(せりか書房、二〇〇四年七月)が議論している。
- (4) 一九三三年のロサンゼルス大会と当時の日本のスポーツ文化的、政治的状況については坂上康博『権力装置としてのスポーツ——帝国日本の国家戦略——』(講談社、一九九八年八月)が詳細に論じている。
- (5) ロサンゼルスの日系コミュニティのオリンピック選手派遣への関わりについては以下を参照。白山源三郎「オリムピック前羅府に於ける準備」

大日本体育協会編集・発行『第十回オリムピック大会報告』一九三三年一〇月。Yamamoto, Eriko. "Cheers for Japanese Athletes: The 1932 Los Angeles Olympics and the Japanese American Community." *The Pacific Historical Review* 69.3 (2000): 399-430.

- (6) この時期の田村(佐藤)俊子については以下の論考がある。工藤美代子、スーザン・フィリップス「晩香坡の愛——田村俊子と鈴木悦——」ドメス出版、一九八二年七月。岩見照代「鳥の子」の飛翔——「大陸日報」を中心に——、呉佩珍「北米時代と田村俊子」、狩野啓子「移民労働者のなかへ(佐藤俊子・鳥の子)」以上すべて渡邊澄子編「国文学解釈と鑑賞 別冊 今という時代の田村俊子——俊子新論——」至文堂、二〇〇五年七月、所収。呉佩珍「ディアスポラからコスモポリタンへ——田村(佐藤)俊子にみる日本・北米・中国——」『台湾日本語文学報』二〇〇号、二〇〇五年十一月。Horiguchi, Noriko. "The Body, Migration, and the Empire: Tamura Toshiko's Writing in Vancouver from 1918-1924." *US Japan Women's Journal* 28 (2005): 49-75.
- (7) 帰国時代の田村(佐藤)俊子の作品については以下を参照。鈴木正和「佐藤俊子「侮蔑」を読む——異文化から見た日本への視座——」『昭和文学研究』一九九四年七月。呉佩珍「ナショナル・アイデンティティとジェンダーの揺らぎ——佐藤俊子の日系二世を描く小説群に見る二重差別構造——」、アン・ソルスキー「新しい」女とその後——田村(佐藤)俊子一九一〇年代作品と一九三〇年代作品におけるジェンダーと人種——」、以上筑波大学文化批評研究会編『翻訳』の圏域——文化・植民地・アイデンティティ——』同会刊、二〇〇四年二月。高良留美子「田村俊子の在日期の評論について」、鈴木正和「カリホルニア物語」『侮蔑』論——カナダ体験後の俊子作品にみる人種思想——、以上は前掲『今という時代の田村俊子』所収。内藤千珠子「双子型ストーリーの謎をひらく——「カリホルニア物語」を中心に——」小平麻衣子、内藤千珠子『21世紀日本文学ガイドブック 田村俊子』ひつじ書房、二〇一四年一〇月。内藤千珠子「目に見えない懲罰のように——一九三六年、

佐藤俊子と移動する女たち——」紅野謙介ほか編『検閲の帝国——文化の統制と再生産——』新曜社、二〇一四年八月。Sokolosky, Anne. "No Place to Call Home: Negotiating the "Third Space" for Returned Japanese Americans in Tamura Toshiko's "Bubetsu (Scorn)." *Nichibunken Japan Review* 17 (2005): 121-148. Sokolsky, Anne. "Writing between the Spaces of Nation and Culture: Tamura Toshiko's 1930s Fiction about Japanese Immigrants." *US Japan Women's Journal* 28 (2005): 76-108.

(8) 田村俊子の作品からの引用はすべて初出雑誌による。

(9) 米国日系移民の歴史とその日本語文学については日比『ジャパニーズ・アメリカ——移民文学・出版文化・収容所——』(新曜社、二〇一四年二月)を参照。

(10) 近代オリムピックの歴史と理念については、川本信正「オリムピックとインターナショナルイズム」『スポーツナショナルイズム』大修館書店、一九七八年五月。武重雅文「近代オリムピックの宿命——マス・デモクラシーとオリムピック——」(亀山佳明編『スポーツの社会学』世界思想社、一九九〇年一月)などを参照。

キーワード：田村(佐藤)俊子、「侮蔑」、オリムピック、ロサンゼルス、スポーツ・イベント

Abstract

Subjectification through an International Sports Event:
The 1932 Los Angeles Olympic Games and Toshiko Tamura (Sato)'s "Bubetsu (Scorn)"

Yoshitaka HIBI

Analyzing Toshiko Tamura (Sato)'s "Bubetsu (Scorn)", this paper explores how second generation of Japanese immigrants, the so-called Nisei, conceived of the 1932 Los Angeles Olympic Games. In the two years between her return to Japan from Canada in 1936 and her departure for Shanghai in 1938, Toshiko wrote a number of novels with Nisei protagonists living in the United States. Most works depict the difficulties to live as minority youths during the anti-Japanese sentiment in the United States of the 1920-30s. "Bubetsu" was the one such novel. Through an analysis of the representation of Nisei and the Olympic Games in the text, I show that apart from being a sports event, the Games function as powerful device to measure the level of educational and cultural refinement, as well as the spirit of the athletes. Ultimately, they became a scale for measuring excellence of each ethnic group or race, appealing to the audience's "blood pride" through nationalistic enthusiasm.

Keywords: Toshiko Tamura (Sato), "Bubetsu (Scorn)," Olympic Games, Los Angeles, sports event